

S 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 二 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
なお、問題番号は一〜三となっています。
- 三 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 四 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
解答用紙を折り曲げたり、破つたり、傷つけたりしないように注意してください。
- 五 この問題冊子は持ち帰ってください。
- 六
- 七

マーク・センス法についての注意

- マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。
- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
 - 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
 - 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずにきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
0	0	0	0	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章は一九六八年に発表された小説からの抜粋である。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

地上でもっとも俊足な獣はチーターという肉食獣だそうだ。この猛獣は当然のこと獲物を追って追いつけぬということを知らない。おそらく人間をもふくめてこの地上でもっとも優雅な食生活および狩猟生活をいとなんでいる存在であろう。群獣を襲う時にも、彼は逃げ遅れた獲物に手当りしだいに飛びかかるような不様なまねはせずに、まず群ぐんの真只中に走りこんで獲物たちとともに疾駆しながら、その日の食欲にあつた獲物をおもむろに選び出すという。獣群は美しい死神に真只中に飛びこまれるといくらか扇型に広がるが、おおむね以前と同じように走りつづける。死神と並んで一所懸命に走っている獣たちがいる。とうに追い越されたのも知らずに、死神の後から死物狂いで逃げてくる獣たちがいる。死神の近づきを肌で感じて足萎えてしまい、地べたに尻もちついて、自分には目もくれぬ死神の素晴らしい疾駆を呆然と見送っている獣たちがいる。それでいて、死神が通り過ぎてしまふやいなや、彼らはまたむつくりと起き上がり、あらためて戦々兢々きょうきょうと死神を追っていく。こうして結局は一頭の犠牲獣を出して狂奔は止むわけであるが、ところで、このような俊足で気紛れな敵に追われる場合と、もつと鈍足で律儀な敵に追われる場合と、実際には存在せぬ敵に追われる場合とで、群獣の恐怖に変わりはあるだろうか。いずれの場合でも、物狂わしく疾駆するということは彼らにとつて本能の促しであり、したがって彼らの分別にかなつた振舞いであり、恐怖の原因を知らぬことが恐怖(1)のシンプレクを倍にもするということは、彼らにはないのだ。すくなくとも、ふたたび草原に散つてのどかに草を食むとき、彼らは実際に a が自分たちの間から出ていようと、何もかもが実体のない恐怖であろうと、そんなことはもう知るものでない。⁽¹⁾ 獣たちにとつては、そもそもパニックというものがないのではなからうか……。

あの頃、私はそんな ① にもつかぬことを朝の通勤時に大まじめで考えたものだった。そして《都会とは恐ろしいところだ》とつぶやいたものだった。都会育ちのこの私が、学生の頃には、都会は私にとって何事でも

なかった。大学を出てから給料をとるようになってからも、懐具合のすこしばかりよくなった私にとつて都会はいよいよ何事でもなかった。私はいわば外側の喧噪けんそうにつりあうだけの喧噪けんそうをうちに宿すくしていたのである。ところがそれから五年間地方で暮らして、行く時にはいかなかった女房と赤ん坊を連れて都会にもどつて来てみると、私は毎朝のラッシュに心の中で呆然と目を見はつている自分に気がついたことだった。中学生の頃から満員電車を通つていたこの私が。

私が見えはつたのは、朝の群衆の静けさだった。あの土地では、こんなに静かではなかった。あの土地でも私は毎朝満員バスで通つていたものだったが、身動きもならぬバスの中にもあちこちに大声の歓談があり、背広(3)を着た村があり、そしてバスが洒落た県庁舎の前にとまると、その村全体がきわめて豊かな表情でざわざわと降りていった。

私にもうすこしましな頭脳があつたら、私はおそらく明快な社会学的考察でもつて私の不安を片づけておいたことだろう。ところが私はこの静けさの印象が群衆の流れの異様な滑らかさから来ると気づいたとき、bとしてただもうひるんでしまったのだ。なぜ都会の人間たちはあの土地の人々のようにざわざわと車を降りないのだろう。朝夕にはきわめて人間蔑視的な改札口を彼らはすこしの立ち見せずに通り返けると、誰に命令されたでもないのに、フロアーにまんべんなく流れ広がって、人を押し退けようとするでもなく、無理に追い抜こうとするでもなく、群のテンポにぴったりと足並みを合わせ、それでいて密集のふとゆるんだところがあれば、すぐに間隙を満たしに行く。そしてやがて階段にさしかかると、流れは静かに淀み、先のほうからゆつくりと傾いていく。まるで苔むした岩の上を平たく滑り落ちる音なしの滝のように、それは見つけているとかすかな目まを誘い出す……。

まさに《整然たる》という言葉がふさわしい。今の世にこれよりも整然たる人の動きはあるだろうか。毎朝のターミナルに一分間に流れこむ人の数と、それを容れる空間の広さとを統計的に処理して見る者は、日々にくりかえされる奇跡わざの業を見ることだろう。社会学者が遠い国の政情分析の際にしばしば見せるおのれの学術への

信頼にここでも忠実であるならば、彼は毎朝の大移動を分析して、《これは不可能であり、したがって真相ではない》と結論しなくてはなるまい。ここでは平均的な人間を統計の資料にとつてはならないのだ。この群衆を形づくっているのは、もつとも訓練された人間なのだ。

しかし、あのような整然さはなぜ、と本気で自問するコウガンさは、^(注1)いかなあ頃の私でも持ち合わせていなかった。それはわかりきっている。暮らさなくてはならないからだ、急がなくてはならないからだ。われわれはそれぞれほかの人間たちを押し退けんばかりのいらだたしさでいながら、まさにそのいらだたしさのゆえに、全体としてゆるやかな流れをつくりなすのだ。あれは、殺到の秩序、急がば回れをおのずと心得た殺到の秩序である。ここでは、急ぐ必要のない者ほど、その気紛れな足運びのゆえに、より悪しき c なのだ。ある朝のこ

と、私はターミナルのホームによく降り立つや、たちまち四十歳ぐらいの男を追い抜いて、何とはなしにその後姿を心にとめた。背を真直に伸ばして、頭をゆつたりと垂れ、まるで夕立ちの中へ濡れもせずに歩み入って行くような淡々たるその姿が、私にはなぜかいかにも^(注2)犬儒的に映つたのだ。そして私はいきなりわけもわからぬ忿濼^{かんげん}に満たされた。そしてそのわけのわからなさにかえって狂喜するような気持で、乱暴に人の流れをかき分けかき分け、改札口の淀みまで来てようやく一息ついた。すると私のそばに、いましたがたの男が立ち止まった。妙にしらじらと輪郭正しい顔だった。その顔が、たまたま私と肩を並べるように立ち止まったのをすまないとも思うように、ひっそりと下を向いていた。その姿に私はまたしても怒りを掻き立てられた。そして私は改札口から流れ出ると、怒りのために冴えかえつた反射神経でもって、人の流れの中に絶えず生じては消える隙間を敏^{びん}捷^{しやう}にたどつて、急ぎ足の人間たちを何人も何人も追い抜き、たちまちフロアーを突つきつて、階段を下るゆるやかな流れの後についた。だがその時、私の二メートルほど左手で何やら懐の中をしきりに探りながら階段へ踏み出そうとしている男があり、見ると紛れもなくあの男が、まるで私よりも先にやつて来たように、静かに足を運んでいた。薄気味の悪いものが私をなぞた。私はいまや人ごみの中のささやかな d となつて、強引に肩を左右に振りながら階段を降り、地下道を走るように横切つた。そして地下鉄がようやく動き出し、ホームに積み

残された人間たちに混ってあの男が端正な顔を真直に上げて滑り退いていくのを目にしたとき、私は斜めにかしいでようやく立っている苦しい姿勢のまま、何と狂暴な喜びに身をゆだねていたことだろう。だが、ふたたび朝の光の中に出て、ふと思いついて駅前のお店で煙草たばこを買って、その一本を口にくわえて悠然と歩き出したとき、私のそばをすうっと通り抜けて、②にも肩をすくめずに淡々と歩み去って行く後姿があった。私は自分が都会にもどって早々にノイローゼになるのではないかと恐れた。

(古井由吉「先導獣の話」による)

(注) 1 いかな——さすがの。 2 犬儒的——シニカル、冷笑的。

問

(A) 〓 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしょで記すこと)

(B) 空欄 a } d にはそれぞれどんな言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を繰り返し用いてはならない。

- 1 新参者 2 無法者 3 犠牲者 4 攪乱者かくらんじや

(C) 〓 線部(1)について。「私」はなぜそう考えるのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 獣たちの行動は、天敵に追われて異常な様子で逃げているときでさえ、生得的な決まりきった反応にすぎないから。

2 獣たちには天敵が獲物を選ぶ基準がまったくわからず、そもそも恐怖感を抱いてうろたえる理由がないから。

3 獣たちは、天敵に捕まるのはそのつど一頭だけであり、群れで行動していれば自分が殺される危険は少ないと知っているから。

4 獣たちの反応は一時的なものにすぎず、天敵に襲われてもそれが去ってしまえばすぐに恐怖感を忘れてしまふから。

5 獣たちが天敵に追われて集団で疾駆するとき、個々の獣は必ずしも自分が走っている理由をわかっているわけではないから。

(D) 空欄 ① にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適當なものを、漢字一字で記せ。(ただし、楷書で記すこと)

(E) 線部(2)について。その説明として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 表面的に都会の生活を楽しんでいただけで、その恐ろしさを知らなかった。

2 若くて無分別だったので、都会の生活の騒然とした流れに身を任せていただけだった。

3 まだ独身だったせいで、都会の生活を自由に謳歌することができた。

4 都会で育つたために、都会の生活を地方の生活と比較して意識したことがなかった。

5 欲望を満たす手段も活力も十分にあつたので、騒騒しい都会の生活になじんでいた。

(F) 線部(3)について。その説明として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 仲間うちだけで親密な閉鎖的集団 2 近代化された生活に残る顔見知りの共同体

3 いつも一緒に通勤する同じ集落の住民 4 外観は新しくても内面は旧弊な人々

5 日常の中に開かれる祝祭的な空間

(G) 空欄 ② にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 気紛れ 2 夕立ち 3 犬儒的 4 その姿 5 朝の光

(H) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「私」は、群衆と共に走りながら獲物を物色するチーターの優雅さを空想しつつ、自分は群衆の中でそのような余裕を持ってないことが不甲斐なかった。

ロ 「私」は社会学的発想に通じているわけではないが、自分をうろたえさせる都会の群衆が特殊な属性を備えた集団であることは確信していた。

ハ 「私」に自明のことと思われたのは、都会の群衆の静けさは先を急ぐ人々がぶつかり合ってお互いの力を減殺した意図せざる結果だということだ。

ニ 「私」がある朝目にした「四十歳ぐらいの男」に怒りを覚えたのは、「男」が群衆と一体化し、その流れを体現しているように見えたからである。

ホ 「私」は群衆の整然さの理由を頭では納得していたが、群衆の中にいることに何のこだわりもなさそうな男を目にしたとたん不可解な情動に突き動かされた。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

家屋自体どちらかといえば貧しく、また、道路その他の都市のインフラストラクチャーを見ても、決して立派であるといえない日本の都市の景観においても、充実したものを感じ、読みとることが出来る時は、単に視覚的に景観が細やかさ、やさしさ、ヒューマンスケールをもっているだけでなく、すぎ間とか「奥」がつくり出す場の緊張感がなさしめる結果であるといつてよい。そして、多くの場合、植物、自然の微地形がその演出に力あつたことはいうまでもない。従つて、もしも日本の都市において「地と図」の像をつくるならば、そこには白と黒とで表現出来る部分以外に、白でありながら白でないゾーンが存在し、しかもそれは、グラフィカルな手段では内容を説明し得ないという困難が常に存在するのである。また広場でなくて「原っぱ」だといふ、⁽¹⁾どちらかといふと「すぎ間」の感覚に近いパブリック・スペースの存在は、最も象徴的に日本の都市の特性を物語っているといえよう。

よく日本の都市には公共の広場がないという。たしかに道以外に西欧的なパブリック・スペースは少なかつた。しかし更に考えてみると、西欧の都市の外部のパブリック・スペースは、常に寺院、スタジアム、マーケット、劇場、市庁舎等の公共的な建築物と対になって存在することが多かつたことに気がつく。ということは、日本はそうした公共的な施設が種類でも数でも遥かに少なかつたといつてよい。江戸を例にとつてみると、十九世紀の初め、既に人口は百万を超し、世界でも最大の都市であつた。当時ロンドン⁽¹⁾は約八十六万、パリがやつと二十五万を超し、ウィーン二十五万、ベルリン十八万といわれた。にも拘らず、これ等の諸都市が既に圧倒的な数と質の公共建築を有していたのに対し、江戸ではタクエツした⁽¹⁾ものとしては精々江戸城と、社寺位であつた。その社寺ですら、どちらかといえば彼等の領域奥深く位置し、その機能とか形態が都市空間に直接参加することは少なかつた。逆に重要な寺院になればなる程、到達の儀式を強調する為に、より奥深いところに位置せられる有様であつた。このように、公共建築とよばれるものは、劇場、浴場程度にとどまり、それとても建築からみれば、市

民のスピリットを高揚する壮大さに乏しかった。このように、公共建築の欠如はとりもなおさず、商いであれ、リクリエーションであれ、あるいは都市的な儀式であれ、すべて身分制度によつて分断され、ごく一部の場合をのぞいて、そうした建築が施設として要求されなかつたことを意味している。つまり、市民の生活は、かなり限られた小集団単位の日常圏の中で行われることが多く、リクリエーションもまた、花見とか、潮干狩りにみられるように、自然とかわりあうものが多かつた。よくいわれるように、江戸は、⁽²⁾巨大な村落の集合であつたという比喩もまたあてはまるのである。

そして全体として中心性の少ない社会構造は、同時に中心性に乏しい都市形態構造となつてあらわれる。しかし、全体での中心性の欠落は、逆に様々な場所性の存在によつて補われてきた。日本の都市の町名、あるいは坂、原などの特殊な部分の名には、その場所にまつわる自然の形状、そこに起きた歴史上のイヴェントにまつわつて名づけられたものが少なくない。このことは、少なくとも、日本人は意識の上で、また現実の都市環境の構築の上で、中心の不在を するものとして、様々な工夫と、微妙な地形の形態操作になつてあらわれてくる。従つて、こうした特異点は、数の多さにおいては事欠かなかつたし、また変化に富んだものであつた。しかも、こうした焦点は、あくまで小集団の日常生活圏の中にインテグレートされたものであり、決してモニユメンタルなものではなかつた。焦点は、単にまちの交叉点にあらわれるだけでなく、周縁部にもあらわれた。

町割りのずれとか、交互する道路のずれが⁽³⁾つくりだす辻、あるいは、ちよつと道路から奥まつてつくられた小社寺の⁽⁴⁾ケイダイ等は、そのよい例であり、⁽³⁾地域にささやかなアイデンティティを与えるものであつた。

江戸から東京にかけて、四百年の都市の形態の⁽⁵⁾ヘンボウには、いくつかの段階があつた。各段階において、様々な原則が、まちづくりに運用された。社会的身分による居住地域の指定、そして町割りの寸法、敷地の規模がきめられ、建物にも、大名屋敷から、武家屋敷、組屋敷、町家、長屋にいたるまでいくつかの典型が明確に存在してきた。しかし、江戸が膨張するにつれて、⁽⁶⁾先ず社会機構の反映としての形態、制御の仕組が崩れていった。そして、過去百年、日本の激しい近代化の波の中で、江戸は東京へとかわり、当然ながら新しい機能的、法制的都

市像が、それまでの古い都市を下図としながら、その上に加えられていったのである。その上、関東大震災と、太平洋戦争末期の数度にわたる空襲によって、特に旧市街地の多くは、焼失し、残ったところも戦後数十年の間に、誰もが夢想もしなかった、建築物の巨大化、高層化、土地の細分化をもたらし、かつては深い武蔵野の一部であった郊外地区および近郊都市は、全く新しい秩序と意図によって形成されつつある。その表層も、土、木、瓦にかわって、コンクリート、鉄、タイル、プラスチック、ガラス等に次第に置き換えられつつある。にも拘らず、今まで述べてきた様に、我々は旧くから日本の都市に存在してきたいくつかの構造上の諸原則と様式、例えば、都市の相に基づく配置の術、道のつけ方、表層のあり方、特異点のつくり方、「奥」および「すき間」という空間概念、そのすべてに濃密にかかわる自然およびその形式化等は、我々の周辺に残された古い市街地の断片には勿論のこと、新しい市街地の中にすら、今日尚、⁽⁴⁾その残像を見出すことはさほど困難ではない。

都市をみることに、理解するということは、実はこうした構造上の諸原則の理解を意味するのであり、都市とは、実際に見える像と、このようにその背後に隠された像が、二重に映し出されたものとしてとらえることが出来る時、我々は文化としての都市の理解に一步近づいたといつてよい。

(榎文彦「都市をみる」による)

(注) 1 インテグレート——統合する 2 モニメンタル——記念碑的な

問

- (A) 線部(イ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)
- (B) 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 生活上の家屋は貧しくても公共の建築物が数多く存在していること。

2 都市のインフラストラクチャーである道路が、自然と調和してやさしく細やかな印象を与えること。
3 ヒューマンスケールを意識した景観が、充実したものを感ぜさせること。

4 「奥」や「すき間」のような特異点が市民の生活圏に組み込まれていること。

5 「原っぱ」がパブリック・スペースとしてその内容をグラフィカルに説明できること。

(C) 線部(2)について。この比喩の指し示す具体的な内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 江戸城と社寺が数少ない公共建築として、江戸を一つの大きな村落のようにまとめあげていたこと。

2 同じ趣味を持つ市民たちが誰でもリクリエーションに参加できる共同体が形成されたこと。

3 自然を愛する原始社会の感情が、江戸の市民たちにおいてよみがえったこと。

4 自然との関わりも含めたさまざまな市民生活が多く的小集団に分かれておこなわれたこと。

5 巨大な劇場や浴場がリクリエーション施設として、江戸の市民に広く活用されたこと。

(D) 空欄 にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 解消 2 確認 3 強調 4 反映 5 補完

(E) 線部(3)について。そのような「アイデンティティ」の源泉の例としてあてはまるものを1、あてはまらないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 劇場や浴場のような公共建築 ロ 坂、辻、原のような形状

ハ 奥まったところにある小社寺 ニ 変化に富んだ特異点

ホ 形態操作された地形

(F) 線部(4)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 江戸が東京に変わるなかで、しつかりした機能的・法制的都市像が確立されたから。

- 2 かつては武蔵野の一部であった郊外地区が、数多くの特異点を新たに示し始めたから。
 - 3 「奥」および「すき間」という空間概念が、都市に想像を超えた秩序や意図を生み出したから。
 - 4 古い構造上の諸原則が、都市の背後に隠された深層として存在しているから。
 - 5 コンクリートやタイルを表層とする巨大建築によって、自然の形式がむしろいつそう濃密化されるから。
- (G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 日本の寺院は都市空間を代表するモニュメントとして、市民に精神的な高揚感を与える到達の儀式を育ててきた。
 - ロ 西欧的なパブリック・スペースは、公共的な建築物を伴わない広場として発展してきた点で、日本のパブリック・スペースと異なっている。
 - ハ 江戸時代にあつた日本の都市の空間概念や構造上の諸原則は、関東大震災と空襲によつて失われたため、現代人には新しい文化都市の理解が求められている。
 - ニ 昔から自然に関わるリクリエーションを好んできた日本人は、コンクリート等によつて作られた近代的な都市空間については表層的な理解にとどまらざるを得ない。
 - ホ 実際に見える像にとらわれていると、日本の都市の本質を理解することは難しくなる。

三 左の文章は、江戸時代の文人、建部綾足が、金沢の大乗寺で夏安居（夏の一定期間仏道修行をすること）をした折の記録である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

あるとき方丈垂示したまへる中に、この山の開基月舟禪師、老いてましませしに、二世の和尚いまだ若くおはしけるが、送行の日禪師を問ひ給ひしに、老僧のたまひけるは、「何をか看経し給ひし」。二世和尚こたへまして、「大経なん看経してさぶらふ」。老僧のいはく、「よくおぼへたまへりや」。和尚はよく記憶する人にておはせば、かの御経を手してむかへ持ちたるごとく、そらになん読みて、そのころごころを問ひたまふほどに、禪師またのたまひけるは、「若き人の記憶、老僧なんぞ及ぶ処ならん。我このほどはよく忘れさぶらふ。叢林の日用板を聞きては喫粥し、鐘を聞きては誦経し、起臥安禪唯常なれども、ひとつもおぼへさぶらはず。さるを、むつかしき御経の事ながきを、胸にきざめるもののごとく、諳んじておはしけることのとふときよ」とあるに、和尚身体汗ながれて、おぼへず老僧のために看破せられたることはづかしきよ、とおぼしければ、それより万巻の胸中を洗つて脱身の工夫に入り給ひぬるが、ある時西海に手杖を鳴らして、長崎の津なる東明山にのぼり、一夏の安居をむすばれしに、放参の日なりけん、老たる尼の茶話して居けるが、

(5) 籠耳はいつも初音ぞほととぎす

といふ句をかたりけるを、和尚なにげなく聞きて、はじめて胸中花のひらけるごとく、疑團氷の消るごとくおぼしければ、おのれこの句をしてその昔きかば、父禪師のあざむきにはあはざるべきをと、それより加賀の国に帰りたまひしといふこと、よしよし垂示したまひける。我安禪の室に入るといへども、菩提心も無くて、唯かの風雅の一場なりしかば、法の事はおぼへはべらねど、発句のことなりしかば、よく耳にとまったり。まことにたふとき垂示にやありけむ。

かくて夏も過ぎて、文月十六日といふには、おのがじし別れいづるに、我はなほ、朝顔の秋まちわびたるが、

露もてひらけ出る心地になん急ぎて、朝とく暮柳舎の主をとふに、(注16) 希因うちわらひて、「これより風雅の安居なるべし」といふ。

『紀行』による

(注)

- 1 方丈——住職。
- 2 開基——寺の創立者。
- 3 送行——陰曆七月十五日、夏安居を終えた僧が自分の寺に帰ること。
- 4 大經——宗派の中核となる大部の經典。
- 5 叢林——寺院。
- 6 日用板——寺院で日常のきまりを告げるために鳴らす板。
- 7 喫粥——食事をとること。
- 8 安禪——座禪。
- 9 脱身の工夫——身をおるがままの状態にするための修行。
- 10 手杖——禪僧が旅をするときに用いる杖。
- 11 東明山——東明山興福寺。黄檗宗の寺。
- 12 放參——禪宗の寺院ですべての行事を休むこと。
- 13 籠耳——聞いてもすぐに忘れてしまうこと。
- 14 疑團——心の中でしこりとなっている疑惑のかたまり。迷い。
- 15 風雅——ここは俳諧のこと。
- 16 希因——金沢で酒造を営んでいた綿屋彦右衛門の俳人としての号。暮柳舎とも号した。

問

- (A) ——線部(1)以下は「方丈」が語った話である。この話の終わりの六字を本文から抜き出して記せ。ただし、句読点は含まない。
- (B) ——線部(2)の現代語訳を八字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。
- (C) ——線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 若い人の記憶力に、老僧がどうして及ぶはずがあるうか。

- 2 若い人の記憶力に、老僧がどうして及ばないといえようか。
- 3 若い人の記憶力に、老僧などでも及ぶことはあろうか。
- 4 若い人の記憶が、老僧のことなぞにどうして及ぶはずがあろうか。
- 5 若い人の記憶が、老僧のことなぞにも及ぶことはあろうか。

(D) 線部(4)について。何を「はづかし」く思ったのか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 和尚が老僧の耄碌もろろくを思わず見抜いてしまったこと
- 2 和尚が老僧に自らの未熟を見抜かれてしまったこと
- 3 和尚が老僧に実は物覚えが悪いのを見抜かれてしまったこと
- 4 和尚が老僧から身に余る賞賛を得てしまったこと
- 5 和尚が老僧をあなどっていたことが露顕してしまったこと

(E) 線部(5)の句の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 籠耳であることを、ほととぎすの初音を聞かされた。
- 2 籠耳であるのは、いつもほととぎすの初音を聞いている。
- 3 籠耳であるゆえ、ほととぎすの鳴き声をいつも初音として聞くことができる。
- 4 籠耳であるゆえ、ほととぎすの初音を聞いたことをいつも忘れてしまう。
- 5 籠耳であるゆえ、ほととぎすの鳴き声が初音からうまくなつたのを実感できない。

(F) 線部(6)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 いたずら
- 2 ごまかし
- 3 へりくだり
- 4 うらざり
- 5 あざけり

(G) 線部(7)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 詳細に 2 楽しげに 3 由緒ありげに

4 ものものしく 5 心地よく

(H) 線部(8)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 人それぞれ 2 おのずから 3 わがままに

4 連れだつて 5 われさきに

(I) 線部(9)の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 秋を待っているのに、朝顔の花がまた咲いてしまい、嘆かわしく思う気分。

2 待っている秋にはならなくても、毎朝咲く朝顔の花を見て、開き直っている気分。

3 秋を待つなか、朝顔の花が毎朝咲く様子を見て、勇気づけられる気分。

4 待っていた秋になり、朝顔の花がようやく咲いたように、解放された気分。

5 待っていた秋にはなつたが、朝顔の花は咲いてもすぐにしぼんでしまうので、慌ただしく思う気分。

(J) 線部(a)と(e)の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答

えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 完了 2 存続 3 推量 4 過去推量

5 断定 6 存在 7 尊敬 8 受身

(K) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 真摯な気持ちで対象に向き合えるから、物事を忘れることは悪いことではない。

ロ 「老たる尼」は、身分は「老僧」には及ばないものの、「老僧」よりも深い悟りを得ている。

ハ 多くの知識や経験を得た老人にならないと、深い悟りの境地には至れない。

ニ どんなに記憶力がよくても、大部の経典をいつも間違えることなく暗誦するのは難しい。

ホ 筆者は仏教の教えには疎いが、俳諧の道に遊ぶなかでその真理の一端に触れている。